

電気のふるさと



特集

「協働」と「連携」によるまちづくり②
～佐賀県唐津市・玄海町の「唐津コスメティック構想」～
広範で重層的な産学官連携で
国際的コスメティッククラスターを推進

■わがまち自慢 ～町長室から～
宮城県女川町

わがまち自慢

町長室から



おながわちよう
宮城県女川町
すだ よしあき 町長
須田 善明



女川町民の「立ち上がる力」の強さ

これまでの復興の歩みのなかで、本場に大きな力となってくれたのは、女川町民の「立ち上がる力」です。女川町の人々は、あれだけの災害があつて、その中でどうするかとなつたときに、「誰かが何とかしてくれる」ではなく、「自分たちで前に進まなければならぬ」という意識はとても強かつたと思います。

そのような意識を町民のみならずが持つていたおかげで、こまごま復興を進めてくることができました。「今、何をしなければいけないか」という役割認識、「どこに向かわなければいけないか」という大きな方向性を、町民同士や

行政側も共有してきたからこそ、官民協働で復興に取り組むことができたと思います。

外部からのNPOやボランティアの方々とも、うまく連携できたのも、大きな力になりました。最初は支援する側、される側の関係だったのですが、やがて「一緒にやっていたりパートナー」、「この場所でも自分も一緒に再スタートさせたい」と思つて外から支援に加わつていただけの方々が多かつたのはたいへんありがたかつたです。また、外部の方々にもそのように思つていただけるような「熱」を持ちながら行動し続けてくれた町民の皆さんを、非常に心強く思いま

す。外部から支援に加わつていらっしゃる皆さんも、女川町で事業を始めた方、女川町のファンになつて休日遊びに来てくれるなど、様々な

関わり方をしてくれてます。そういう外部の方々を受け入れられるのも、女川町民の良さでしょう。

女川町民が持つ商人としての精神

行政体としての女川町の区域は、明治の女川村の頃から変わつていません。そのためか、地域への帰属意識は合併が繰り返されてきた地域と比べて強いと思います。自分が生まれ育つた土地で、上の世代がやつてきたことをよく見てきたと思ひますし、自分たちがプレイヤーになつた時にどう行動すべきかをわかつています。また、それを次の世代に伝えていくような風土もできあがっています。

大水揚げを誇る漁港にまで成長してきました。このように、時代の変化に対して、個人レベルでも、地域全体としても、変化を恐れずにチャレンジする気風がある地域なのです。そういう意味では、女川町は単なる漁業のまちではなく、水産業のまち、商人のまちです。このような歴史に育まれた風土も、女川町の人々の「立ち上がる強さ」の根底にあるのではないのでしょうか。

女川は元々小さい漁村でしたが、民間業者が港の埋め立て工事を行ったことがきっかけとなつて企業集積が始まり漁港が発展してきた経緯があります。また、カツオやサケ・マスなど遠洋漁業が中心だった時代から、200海里規制を経て、現在はサンマが漁業の主力となつているのも、もとはひとつの事業者が魚体の選別機を導入したのがきっかけです。選別機の導入によつてマーケットニーズに合ったものを出荷できるようになり、その事業者が軌道に乗るのを見た他の事業者も参入して、サンマの一

女川町の人々の商人としての精神は、水産物や加工品の美味しさにも通じています。女川で水揚げされたサンマを贈ると、多くの方に「こんなに美味しいサンマは初めてだ」と言つていただけます。このように言われる所以は、女川の業者さんの「出荷するからには恥ずかしいものは出せない」というプライドです。プロの目で選別して、良いもの

大震災直後の女川町 (2011年3月)



大震災後の女川町中心部 (2011年8月)



「女川町商店街復興祭」の開催 (2012年3月) サンマの水揚げ風景 (2012年12月)



商工会有志で立ち上げたコンテナ村商店街 (2011年8月)



木造仮設店舗「きぼうのかね商店街」をオープン (2012年4月)



トレーラーハウス宿泊村「エルファロ」オープン (2012年12月)



「復興まちづくり女川合同会社」による「女川プランニングプロジェクト」の調印式 (2012年9月) [女川町提供]



観光客に人気の「女川丼」



第41回宮城県水産加工品品評会で受賞した水産加工品〔女川町提供〕

上左:「御膳蒲鉾かき」
左奥:「たこのやわらか煮」
左手前:「ほやたまご」

復興を通じてまちに新たな価値を

をきちんと取引しています。ですから、ぜひ安心して女川のサンマを味わっていただきたいですね。

サンマだけでなく、女川の特産物はやはりどれも美味しいです。水産加工品のほうも力を入れて取り組んでいます。第41回宮城県水産加工品品評会では、そのトップ3を女川町の加工品が受賞しました。最優秀賞にあたる農林水産大臣賞を高政さんの「御膳蒲鉾かき」、宮城県知事賞を鮮冷さんの「たこのやわらか煮」、マルキチ阿部商店さんの「ほやたまご」が受賞しました。事業者さんの加工技術も高いです。ぜひ、女川の水産加工品も食べていただきたいですね。

これまでの復興事業では、駅前
の商業エリアを中心に整備が進んで
きました。海側・山側の全ての
エリアが整備されるのは約2年半
後になります。今回のまちづくり
では、どうしたら「街の活力」、「新
たな人の流れ」を作ることができ
るか、どうしたら「ここに生きる
人々のポテンシャル」を引き出せ
るか、ということを考えて取り組
んでいます。まちに新しい価値を
付与させたいのです。

例えば、駅前から海に向かうレン
ガみちは、その延長線上から初日の
出が昇ってくるように設計させま
した。今年は、初日の出を見るため
に約600人が集まりました。嬉
しかったですね。もちろん、そのた
めだけに作ったのではなく、この場
所の価値のひとつにすぎません。こ
こでファッションショーやミュー
ジカルも開催しています。このレン
ガみちは、道であり、ステージであ
り、「空間」であり、「場」なのです。
駅前の商業エリアには、レンガ
みちを軸にイートイン、クラフト
体験教室、ギャラリーなど多種多
様なテナントが入っていますが、
テナントが提供するコンテンツだ
けでなく、イベント等をきっかけ
に人が集まり、町内外のプレイヤ
ーの目に留まることで「女川って
いいよね」と注目され、多くの方々

が駅前の商業エリアを活用して
れるような「場」づくりを目指し
ています。我々がイベントをや
り続けると疲弊してしまいがち
そうではなく、こちらがサポート
する側となって町内外のプレイヤ
ーに空間をうまく使ってもらえる
ような仕掛けづくりをしていき
たいと思っています。住んでいる
方々、訪れた方々に「この場を好
きに使っていいんだ」と思っ
てもらえる空間にしたい、それが根幹
にある思いです。

今回のまちづくりのもうひとつ
のテーマは、「海と人々の生活を
近づきたい」ということです。我々
は海のそばに住んではいますが、
日本では多くの場合、海はあくま
で仕事場なんです。ですから、海
辺に佇んで、その空間や時間の流
れを楽しむような場所や習慣が、
これまでの女川町にはあり
ませんでした。それが自然
に生まれてくるような場を
作っていききたいという、以
前からの思いを復興に投影
しています。

しかし、現在整備が進ん
でいるのは本場に一部であ
って、今後、海側・山側の
全てのエリアが繋がって、
駅前の商業エリアも本場の
意味を持つことができます

す。まちづくりは、まだまだこれか
らです。現在は「復興」という点で
注目されているかもしれませんが、
10年後にはそのような点で注目さ
れることは無くなっているかもし
れません。今の「復興」を通じて、
住んでいる人、外部からやってく
る人の活力を引き出せるようなま
ちづくり、新たな人の流れを作っ
ていくことが重要だと思います。

女川町からポジティブなメッセージを発信

女川町の人々の、どんな苦しい
状況でも前を向いて進んでいく力
は、やはり他には負けないものが
あると思います。先の震災の記憶
を風化させてはいけないという声
もありですが、我々がそのことば
かりを気にかけているわけにもい
きません。震災の記憶というのは、
一般には、悲しみ、凄惨さ、自然
の脅威などだと思いますが、女川
町が伝えていかなければならない
のは、「いかに立ち上がってきた
か」、「どんな状況であっても、も
う一度立ち上がることができる」

ということだと思えます。
先の震災では、当たり前前
に思っていたことを一瞬で無くして、当
たり前がいかに脆いものであるか
を知りました。それでも、また新
しい当たり前を作ろうとしてやっ
てきています。それもいつ失われ
るか分からないのですが、「そ
れでも立ち上がるんだ」というポ
ジティブなメッセージを発信して
いける場所が、ここにあります。
ぜひ一度、女川町を訪ねてみてく
ださい。心からお待ちしております。
(談)



イベントなどで内外の人々が
自由に使える空間となってい
る駅前のレンガみち



2016年12月にオープン
した水産物を中心とした物
販飲食施設「ハマテラス」



駅前から海に向かうレンガみち

特集

「協働」と「連携」によるまちづくり②〇
佐賀県唐津市・玄海町の「唐津コスメティック構想」

広範で重層的な産学官連携で

国際的コスメティッククラスターを推進



北部九州で、美容・健康産業のクラスターの実現を目指す『唐津コスメティック構想』が注目を集めている。今回は、その中心となっている「一般社団法人ジャパン・コスメティックセンター」の活動を紹介したい。



フランス・コスメティックバレー 協会前会長からの提案

今、唐津は国内外の熱い視線を浴びている。美容・健康・素材・交流などにおいて、国際的な産業の集積を目指す『唐津コスメティック構想』の取り組みが、大きな注目を集めているのだ。

その核となっているのが「一般社団法人ジャパン・コスメティックセンター」（以下JCC）。地元

の化粧品関連会社を中心に、佐賀県、唐津市、玄海町、唐津商工会議所、九州大学、佐賀大学などが参加する産学官の連携組織となっている。

この『唐津コスメティック構想』は2012年1月、フランスの化粧品原料製造会社社長アルバン・ミュラー氏の、アジア市場開拓を

唐津市・玄海町情報

【人口】唐津市:124,939人 玄海町:5,876人 (平成29年2月1日現在)

【面積】唐津市:約487.58km² 玄海町:約36km²

【発電所データ】九州電力(株)玄海原子力発電所、玉島水力発電所、厳木・厳木第2水力発電所

【本特集問合せ先】

一般社団法人ジャパン・コスメティックセンター URL <http://jcc-k.com>



見すえた唐津訪問をきっかけに始まる。

ミユラー氏は、1994年に設立された『フランス・コスメティックバレー協会』の前会長でもあった。アメリカのシリコンバレーはIT産業の集積地として知られているが、フランスのコスメティックバレーは、世界最大の化粧品産業集積地である。中部のシャルトルを中心とした半径150kmにもおよぶ広大な地域に、化粧品メーカーをはじめ、大学、研究機関、製造工場などが集積している。さらには周辺農家が栽培する植物から原材料を抽出し、製造、検査、物流までの一貫したサプライチェーンで、いわゆる「クラスター」を形成しており、化粧品を軸とした6次産業化が進んでいる地域である。



(一社)JCCの代表理事であり(一社)唐津観光協会の会長でもある山崎信二さん

「クラスター」を形成していた。

それに加えて、中国や韓国に近しいという地理的な条件、豊かな農産物に代表される地域資源を持つ唐津周辺地域の可能性に着目したのだ。隣の玄海町には薬用植物栽培研究所もあった。

こうして、ミユラー氏は関係者に、「日本版コスメティックバレー」の創造を提案することになる。「アルバンの話には夢がありましたね」と、語るのは株式会社ブルーム社長の山崎信二さんだ。JCCの代表理事でもある。アルバン・ミユラー社とは以前から取引を行っていた。

「実は私も、以前からイメージはあったんです。唐津はもともとアジアに近い港町です。アジアの化粧品市場開拓を考えると、ヨーロッパからの輸送コストが高いことや、日本の製造技術の高さは大きな利点です。また、豊かな水や土壌から生まれる農産物もあり

ます。コスメティックバレーの考え方を、農産物の6次化を含めて、この唐津でやってみたら面白いと思っていました」

提案を受けた山崎さんは早速、行政に話を持って行くと、担当者は興味を持ってくれた。その年、行政職員とともに、フランスのコスメティックバレーを視察する。

国際的クラスターを目指す 「フラットフォーム」として

翌年の2013年の4月には、フランス・コスメティックバレー協会と唐津市の間で、協力連携協定が締結された。そして、その年の11月に、ジャパン・コスメティックセンターが設立され、初代会長にアルバン・ミユラー氏が選出された。最初は4社からのスタートであった。話が出てから設立まで約2年、そのスピードは速かった。2015年には一般社団法人に移行する。目指すは、フランスのコスメティックバレーをモデルにした「日本版コスメティックバレー」であった。

その活動内容は、内外の各種企業と地域、大学等の研究機関と連携して、情報提供や、ビジネスマッチング、地域資源の発掘および原料供給支援、研究機関への調査研究委託など多岐にわたる。一言で言うと、企業や団体間の

そこは想像を超える産業集積地であった。研究から最終生産までの約800社の企業があり、8大学、国立研究機関、200の公立・民間研究所と提携を行っていた。農業などの一次産業が原料供給を行う6次産業化が進められており、地域全体の製品出荷額は年に2兆円を超すと言われていた。

橋渡しを行い国際的クラスターの創造を目指す「フラットフォーム」であり、「仲人」である。事務局はプロパー職員の他に、佐賀県、唐津市、玄海町の職員が兼務しており、総勢24名の体制だ。県や市・町の全面的なバックアップを受けており、ともにコスメ産業誘致などに力を入れている。

プロジェクトチームは「国際取引拡大」「地域資源活用」「産業集積促進」「産学連携推進」などの担当に分かれており、そのモチベーションは高い。

「なぜ唐津なのかと言えば、ア



(一社)JCC事務局次長の八島大三さん



2013年11月の設立総会 (JCC提供)

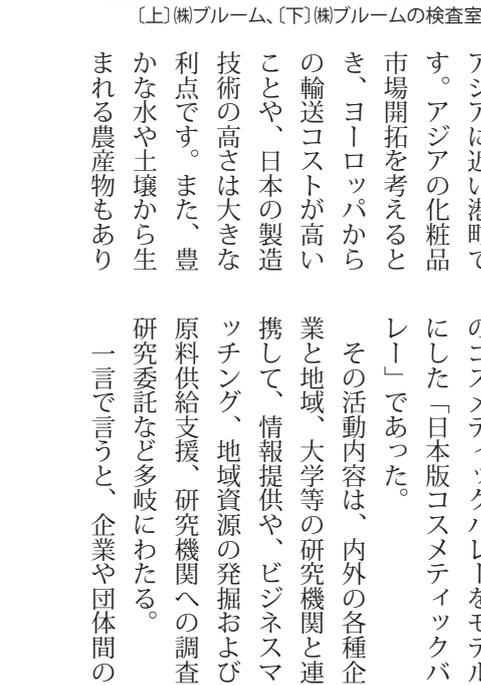
ジアに近く農産物も豊富だからというところもありますが、やりたい民間とやりたい行政、つまり熱を持って果敢に挑戦しようという官民がいたということだと思えます」

こう語るの、立ち上げから関わっている事務局次長の八島大三(唐津市職員)さんだ。

設立から本年度で、3年間で経過した。この間、主に枠組みや体制を整えるという「種まき」を行ってきた。4社からスタートした会員も現在は174社(2016年2月末現在)になった。海外企業との合弁会社の設立や、大手化粧品原料商社も進出してきた。海外との提携もフランス、イタリア、スペイン、台湾、タイの5カ国の化粧品産業団体に広がっている。だが、この3年間は試行錯誤の連続で、様々な課題も見えてきた。



【上】(株)ブルーム、【下】(株)ブルームの検査室



事業化された商品例

(写真はJCC提供)



白美の雫(洗顔石鹸)

白いきくらげのエキスを原材料に使用した洗顔石鹸。
農業生産法人グレイスファーム株式会社
(佐賀県唐津市七山藤川12273)



GO FOR MEN (オールインワンクリーム)

唐津産のトマトと酒粕を原材料に使用した男性化粧品。
YOKO JAPAN株式会社(佐賀県唐津市紺屋町1694-4)



L & cosme(化粧石鹸)

「ざる豆腐」で知られる川島豆腐の豆乳を
原材料に使用した洗顔石鹸。
Luna(佐賀県唐津市京町1768-4)



Natural Olive(基礎化粧品・ヘアケア化粧品)

オリーブを原材料に使ったナチュラルオリーブ化粧品。
株式会社ハーベスト(佐賀県唐津市鏡4751-2)



TEA OIL(オイル・ジェルクリーム)

茶実油を原材料に使ったナチュラルスキンケア。
株式会社緑門 佐賀支店
(佐賀県嬉野市嬉野町不動山乙108)

「具体的にはアジアへの認知度をもっと高めることや、北部九州地域の経済波及効果をもっと高めていかなければならないことです」と、八島さんは言う。

そのために、この地域のそれぞれの分野のサプライチェーンをきちんと整備していくことが必要とされ、現在、15年後のビジョンづくりを行っている最中だ。近く原料商社が進出してくる予定だが、

原材料の生産業者・原料商社・製造加工業者・検査分析業者・容器製造業者・物流業者など、それぞれのプレイヤーが連動するサプライチェーンを造り上げることを目指している。

グローバルには、欧州・中国・アジア地域のバリューチェーンが繋がることである。そのための対外投資(企業誘致)、起業、インバウンドなどをさらに促進していく。

例えば、中国が投資して日本で生産して中国に逆輸入することなども考えられる。化粧品はイメージを売る業界なので、安全・安心・高品質の「メイド・イン・ジャパン」という称号を欲しがるところも多い。

具体的な商品もできてきている。JCCは2015年度だけでも延べ900社にコーディネーターを派遣して、ビジネスマッチや開発費助成の案内、県産のかんきつ類や薬草などの原材料をリスト化して売り込みを図ってきた。

そうした努力も実りつつある。唐津市・玄海町の耕作放棄地で育ったミカンの花を原料にした化粧水を製造した業者や、北部九州地域では2年前に起業してオリーブを原料にした化粧品を製造した業者が出てきた。トマトを材料にして男性化粧品を製造販売している女性起業家や、白いきくらげを材料に使った石鹸を開発した農業生産法人、茶の実から採ったオイルを材料にした化粧品など、地産の素材を使った製品を作った地元会員企業も始めている。現在は水面下で約20の開発プロジェクトが進んでいるという。

会費は、立地や規模に応じて年に1万円から12万円。県内だけでなく県外にも間口を広げており、174社の6割は県外企業となっている。

乾燥したトウキ



薬用植物栽培研究所



「現状では、薬草栽培を行っている農家は7軒ほどで、まだまだ少ないが、作付面積は拡大しつつあり、企業からの栽培契約の打診も増加している。

農産物は見栄えを良くするための工夫をするため、食品としての規格品は約7割ほどだ。化粧品の原材料

また、県本土から約4km離れた加唐島^{かからじま}では、島内に2万本あまり自生するツバキの油を精製する「加唐島ツバキ工房」が、東京の商社と売買契約を行った。

玄海町には「薬用植物栽培研究所」があり、九州大学や長崎国際大学などと連携している。ここではカンゾウやトウキ、ミシマサイコなどの薬草についての効率的な栽培方法などを研究している。また、この研究所

では、町内の農

また、県本土から約4km離れた加唐島^{かからじま}では、島内に2万本あまり自生するツバキの油を精製する「加唐島ツバキ工房」が、東京の商社と売買契約を行った。

玄海町には「薬用植物栽培研究所」があり、九州大学や長崎国際大学などと連携している。ここではカンゾウやトウキ、ミシマサイコなどの薬草についての効率的な栽培方法などを研究している。また、この研究所

「現状では、薬草栽培を行っている農家は7軒ほどで、まだまだ少ないが、作付面積は拡大しつつあり、企業からの栽培契約の打診も増加している。

農産物は見栄えを良くするための工夫をするため、食品としての規格品は約7割ほどだ。化粧品の原材料

また、県本土から約4km離れた加唐島^{かからじま}では、島内に2万本あまり自生するツバキの油を精製する「加唐島ツバキ工房」が、東京の商社と売買契約を行った。

玄海町には「薬用植物栽培研究所」があり、九州大学や長崎国際大学などと連携している。ここではカンゾウやトウキ、ミシマサイコなどの薬草についての効率的な栽培方法などを研究している。また、この研究所

また、県本土から約4km離れた加唐島^{かからじま}では、島内に2万本あまり自生するツバキの油を精製する「加唐島ツバキ工房」が、東京の商社と売買契約を行った。

玄海町には「薬用植物栽培研究所」があり、九州大学や長崎国際大学などと連携している。ここではカンゾウやトウキ、ミシマサイコなどの薬草についての効率的な栽培方法などを研究している。また、この研究所

また、県本土から約4km離れた加唐島^{かからじま}では、島内に2万本あまり自生するツバキの油を精製する「加唐島ツバキ工房」が、東京の商社と売買契約を行った。

玄海町には「薬用植物栽培研究所」があり、九州大学や長崎国際大学などと連携している。ここではカンゾウやトウキ、ミシマサイコなどの薬草についての効率的な栽培方法などを研究している。また、この研究所

また、県本土から約4km離れた加唐島^{かからじま}では、島内に2万本あまり自生するツバキの油を精製する「加唐島ツバキ工房」が、東京の商社と売買契約を行った。

玄海町には「薬用植物栽培研究所」があり、九州大学や長崎国際大学などと連携している。ここではカンゾウやトウキ、ミシマサイコなどの薬草についての効率的な栽培方法などを研究している。また、この研究所

また、県本土から約4km離れた加唐島^{かからじま}では、島内に2万本あまり自生するツバキの油を精製する「加唐島ツバキ工房」が、東京の商社と売買契約を行った。

玄海町には「薬用植物栽培研究所」があり、九州大学や長崎国際大学などと連携している。ここではカンゾウやトウキ、ミシマサイコなどの薬草についての効率的な栽培方法などを研究している。また、この研究所

また、県本土から約4km離れた加唐島^{かからじま}では、島内に2万本あまり自生するツバキの油を精製する「加唐島ツバキ工房」が、東京の商社と売買契約を行った。

玄海町には「薬用植物栽培研究所」があり、九州大学や長崎国際大学などと連携している。ここではカンゾウやトウキ、ミシマサイコなどの薬草についての効率的な栽培方法などを研究している。また、この研究所

11の研究機関や大学との連携で 広範なネットワークを構築

コスメテック構想に連携した原料の生産拠点づくりも進んでいる。



薬用植物栽培研究所百草園園長の古館保弘さん



「全国高校生マイプロジェクトアワード2015」の学校部門で、文部科学大臣賞を受賞した唐津東高校(JCC提供)



佐賀大学で研究して全国で初めて品種登録された「さがんルビー」

を持つている。唐津市内にある農学部付属の「アグリ創生教育研究センター」には、原材料を抽出・保存する装置があり、また、国立大学で初めて「オーガニック認証」を受けている。

の成分の多くは茎と根にあり、100%近く使える。乾燥させて、そこから抽出するので農家のコストは軽減する。特に中山間地の農家にとっては、食料としての農産物と違い、エネルギーコストのから不利な作物といえる。

しかし、原材料を供給できる生産者は、まだまだ少ない。この課題についてJCCは、現在ある材料を有効活用し、生産農家と更なる連携を行う方向でいる。

JCCにおける大学等の研究機関の役割も大きい。佐賀大学は、そのミッションが「地域とともに未来に向けて発展する」というもので、JCCの立ち上げから、積極的に参画してきた。

例えば、ある作物を素材にする場合、目的の成分を作るために品種改良したり、植物の組織培養を使って目的の成分を抽出することができる。そうしたことで、素材研究開発などの役割を果たしている。

佐賀大学農学部は、かんきつ類の遺伝子保存技術では日本一を自負しており、世界でも有数の技術



佐賀大学農学部長の渡邊啓一教授

「さがんルビー」というグレープフルーツがある。これは佐賀大学で研究して全国で初めて品種登録された国産のグレープフルーツだ。今では、農家ともに「産学協働」で育てた佐賀の特産品となった。エキ스는化粧品素材として登録している。

昨年、この「さがんルビー」を材料に、唐津東高校の高校生が佐賀大学と連携してリップクリームとサイダーを製作したことが話題になった。この製作の橋渡しをしたのもJCCだった。資金はクラウドファンディングで調達し、市内の企業や個人が協力したこのプロジェクトは、「全国高校生マイプロジェクトアワード2015」の学校部門で、全国1位となる文部科学大臣賞を受賞した。

化粧品のみならず唐津という地域を世界に売る

化粧品業界は、分野ごとに専門性を持つ企業群が分業しており、ほとんどが中小企業という産業構造を持つている。その意味では、垂直に統合され資本力の高い大企業と違って、中小企業が、海外に拠点を設けることや自社製品を輸出することのハードルは高い。しかし、逆にこうした産業構造だからこそ、会員の特性を生かしながら水平的な統合が可能になり、お互いの長所と短所を補完し合うことができる。

JCCは、海外拠点や輸出入の課題を克服するために、各分野のサプライチェーンを強化すると同時に、そこからスピノフした「地域商社」を、来年度中に設立することになった。企業などの出資を募り、非営利の社団法人では限界のある、企業間の契約や市場開拓を強力に推し進めることを決めている。

ちなみに、「さがんルビー」を使った化粧品は、近く大手メーカーから発売の予定だ。

JCCに加盟する大学研究機関は2016年度の段階で、10大学。九州以外では信州大学、東京工科大学、東京農業大学が加盟しておりより広範なネットワークとなつ

ている。

農学部長でJCCの理事でもある渡邊啓一教授は次のように語る。「化粧品会社の研究機関が唐津に来たり、IT産業などのコラボ、コスメに関わる人材育成のための職業大学などが誘致できれば、もつと面白くなります。和食が世界



台湾のビューティパレとの調印式

遺産になりましたが、『メイド・イン・ジャパン』の化粧品素材はブランドになります。佐賀が健康美容産業の集積地であり、世界の拠点となるようにしていきたい。唐津という一地方から、人の生き方を含めて世界に発信していく可能性は十分にあります」

また、今年度は、フランス、スペイン、イタリアに続いて、台湾、タイの化粧品産業団体と連携協定を結んだ。これはアジアとのバリエーションをさらに強化することによって、アジア市場の可能性をさらに高めていくものだ。

代表理事の山崎さんをはじめ、事務局次長の八島さん、佐賀大学の渡邊教授などが口を揃えて言うのは、海外の人々の、日本の製造技術や、原材料に対する評価が高いことだ。

山崎さんは唐津観光協会の会長でもある。「国内向けのオリジナル・ブランドは必要だと思いますが、海外から見れば『メイド・イン・ジャパン』であることがブランドなのだ、と言っています」

つまり、唐津には豊かな自然があり、歴史遺産もある。さらには奥深い伝統文化も根づいている。

これらを背景にした高度な製造技術や産品それ自体が、ブランドであるというのだ。「日本の唐津」というブランドとともにも商品売って行かねばならないということだ。事実、JCCのホームページには唐津の伝統文化が多く紹介されている。また会員企業の中には観光業者も参加している。「唐津コスメティック構想」には、単に化粧品の産業集積にとどまらず、海外からの交流人口を引き込み、北部九州の一大産業集積地にしよという、壮大な心意気が潜んでいるのである。



フランスのパリで開催されている展示商談会「Cosmetics 360」に出展

振興トピックス

このコーナーでは、主に電源地域の地域活性化に向けたソフト事業の話題を取り上げています。今回は山口県下関市、岡山県真庭市、青森県六ヶ所村、岩手県西和賀町の取り組みを紹介します。



灯台を地域資源として活用

山口県下関市 地図A

角島は、下関市豊北町の沖に浮かぶ、周囲17kmに約8000人の住民が住む小さな島です。日本海は響灘のコバルトブルーの海と白い砂浜で知られ、中国地方や北九州地方では、キャンプや海水浴の島として知られていました。

平成12年に角島大橋が開通すると、TVコマースィナルや映画のロケ地になったこともあり、一気にその名が知られるようになりまし。今では山口県を代表する観光地になっています。

この角島大橋は自然環境に配慮した設計で、コバルトブルーの海に長さ約1.8kmの優美な曲線を描いています。通行無料の離島架橋としては、全国屈指の長さとなっています。

島の西北端には、明治9年に初点灯した角島灯台があります。明治政府の

石造灯台としては日本第3位の高さを誇る



コバルトブルーの海に架かる角島大橋

いこうとするものです。ロマンズの聖地にふさわしい全国各地の灯台を、「恋する灯台」として認定していますが、角島灯台は、もちろんその中の

御雇外国人の設計家R・H・ブランドンの最高傑作で、「日本の灯台50選」のひとつに数えられています。石造灯台として日本第3位の高さになっています。平成5年、周辺は公園として整備され、夕陽の名所でもありません。日本にある参観できる灯台15基のひとつでもあり、最上部から日本海の絶景を望むことができます。灯台の脇には角島灯台記念館があり、灯台長の部屋が復元されています。

灯台といえば、「恋する灯台プロジェクト」というものがあります。これは、一般社団法人日本ロマンチスト協会(本部・長崎県雲仙市愛野町)と日本財団(東京都港区)が共同で実施するプロジェクトです。灯台を

「ふたりの未来を見つめる場所」として定義することで「ロマンズの聖地」へと再価値化して

ひとつに挙げられています。

灯台は、その性格上、岬や離島などの風光明媚なところに立地しています。それを地域資源としてとらえ、積極的に交流人口増加策に取り入れていく動き

が全国で加速しています。

141年たった今でも現役として点灯している角島灯台ですが、豊北町観光協会では、そうした交流人口拡大策のひとつに活用しています。

薬草の魅力を引き出し 特産品開発、シンポジウム開催へ

岡山県真庭市 地図B

岡山県真庭市は、中国山地の山間に位置する自然豊かな地域です。その山里の豊かな自然の恵みのひとつである、薬草に着目した特産品開発が、同市の富原地域の進められています。真庭市の山林や里山には、タンポポ、オオバコ、ハコベ、アザミ、スベリヒユ、イノコズチ(いっとうべ)、ナズナ(ぺんぺん草)などの四季折々の薬草が豊富で、いづれもミネラルなどの栄養価

発など、精力的に活動を展開してきました。昨年は、「ひるぜんワイナリー」と「やまんばん」とのコラボレーションにより、季節の薬草を使用した「薬草カレー」を開発し、メニューとしての提供も始まりました。薬草の風味とスパイスの香りが絶妙にマッチした逸品で、健康志向の強い方には特に人気のメニューとなっています。

が高いことで注目されています。その薬草を使った特産品開発の大きな力となっているのが、富原婦人林研クラブ「やまんばんあば」の皆さんです。薬草の採取

このような取り組みに加えて、平成27年からの3年間は、農林水産省の山村活性化支援交付金を活用して、富原地域の資源発掘や商品開発に力を入れてきました。地区では富原地域振協議

はもちろん、その時期しか取れない旬の薬草を使った料理教室の開催、高校生向けの調理実習の実施、薬草を使ったお茶の開

フィールドワークの開催



富原婦人林研クラブによる薬草料理教室



開発された「薬草カレー」



会を組織し、地元の事業者や行政関係者向けの薬草勉強会を開催しているほか、「やまんばんあば」の皆さんと一緒に薬草料理の講習会を行うなど、地域をあげての薬草の特産品化に取り組んでいます。また、同協議会と「やまんばんあば」との共同で、薬草カレーのレトルト商品化に向けて試作が進められています。

この秋には、「第6回全国薬草シンポジウム2017 inまにわ」の開催が決定しました。このシンポジウムでは、全国の薬草に関わる団体や事業者が一堂に会し、「食と健康」、「里山の資源を活かした地域活性化への取り組み」などについて、情報共有・発信が活発に行われます。シンポジウム開催に向けて、今後も薬草を活かした地域活性化の取り組みが進められます。薬草が地域の可能性をどこまで広げられるのか、期待されています。

ふるさと納税の返礼品 リニューアルで特産品PR・販路拡大

青森県六ヶ所村
地図

青森県下北半島の付け根に位置している六ヶ所村。太平洋に面しているため、海産物が豊富で、古くから漁業が営まれてきました。一方、内陸の丘陵地帯では広大な土地と冷涼な気候を活かした根菜類の栽培や酪農が盛んです。しかし、少子高齢化・人口減少の影響により、第一次産業従事者の減少・高齢化が進み、担い手の確保・育成や経営の安定化が喫緊の課題となっていました。

青森県下北半島の付け根に位置している六ヶ所村。太平洋に面しているため、海産物が豊富で、古くから漁業が営まれてきました。一方、内陸の丘陵地帯では広大な土地と冷涼な気候を活かした根菜類の栽培や酪農が盛んです。しかし、少子高齢化・人口減少の影響により、第一次産業従事者の減少・高齢化が進み、担い手の確保・育成や経営の安定化が喫緊の課題となっていました。



リニューアルされたふるさと納税返礼品

「六ヶ所村まち・ひと・しごと創生総合戦略(平成27

デザインの力で 地域の魅力『ユキノチカラ』をPR

岩手県西和賀町
地図

西和賀町は、秋田県との県境に位置する豪雪地帯。冬の積雪は2mにも達します。そんな地域にとつての厄介者である「雪」を、町の魅力的な地域資源として捉え、広くPRしていこうという西和賀町デザインプロジェクト『ユキノチカラ』が平成27年から始動しています。

町では、以前から自然や風土を活かした特産品が開発されてきましたが、特定の製品の生産量が伸びても、それを地域全体のブランドインングにうまく繋げられずにいました。そんな時に、地元信用金庫から、町全体の特産品・地域資源の付加価値をデザインによって高めてPRしてはどうかとの提案を受け、このプロジェクトが動き出しました。

んだ特産物、これらを象徴して生まれたブランドコンセプトが『ユキノチカラ』です。チーム全体でこのコンセプトを共有しつつ、各事業者と担当デザイナーが個別に話し合いを重ねることで、全体の統一感を保ちながらも個々を光らせる商品・デザインが生み出されました。また、この取り組みは地元信用金庫がチームに加わることで、金融面でも事業者をサポートできる仕組みとなっています。

このプロジェクトに、参加した各事業者や関係者も手ごたえを感じています。地域の魅力をPRする取り組みは、実は自分たちの地域の魅力を再発見することにも繋がっているようです。

とが狙いです。新たに返礼品に加えられたのは、村で水揚げされた新鮮な海産物、特産の根菜類を中心とした農産物加工品、村が誇るブランド牛『小川原湖牛』などです。

海産物からは、ウニ、イカ、タコ、アワビ、ヒラメなどが新たに返礼品に加わりました。なかでも甘くて濃厚な味わいが特徴のウニは、漁の解禁が年2〜3回であるため入手が難しく、希少なウニです。農産物加工品からは、きめ細かい舌ざわりが特徴の長芋を使用した和菓子や漬物、カロテン含有の多いニンジンジュース、やわらかな酸味とほのかな甘みの特徴のブルーベリーを使用したスイーツが、新たに返礼品に加わりました。

『小川原湖牛』は、焼き肉用、



飯豊町の恵みがたっぷりの
アイスクリーム

IIDE山oh!

いいでまち
山形県飯豊町
地図 E

飯豊町産の生乳を使用したアイスクリーム『IIDE山oh!』。開発したのは、町職員や若手女性酪農家、飲食店などで作る「いいでアイスクリームプロジェクトチーム」。

生乳には、町内の牧場で育った放牧牛の良質な乳を使用し、バニラ味のほか、町内産のラズベリー、サクランボ、つや姫など、季節ごとのフレーバーを楽しむことができます。

試食会での町民の意見も取り入れ、子どもからお年寄りまで幅広い年代が楽しめる味に仕上がっています。飯豊町の恵みが詰まったアイスクリームをぜひご賞味ください。

DATA
【お問合せ】農家レストラン エルベ ☎0238-86-2828
【URL】<http://www.erbe.jp/>



開発された
「IIDE山oh!」



眺山牧場で育った放牧牛の良質な乳を使用

「おもてなし」の心が生んだ地鶏

川俣シャモ

かわまたまち
福島県川俣町
地図 F

川俣町では、古くから娯楽として闘鶏が盛んだったため、軍鶏が飼われていました。その名残が現在の川俣シャモの原点です。「田舎ならではの最高の食材で心と身体を養っていただきたい」といった、おもてなしの心から、食用としての川俣シャモが生まれました。深みのあるコク、適度な弾力の肉質がその魅力です。噛めば噛むほど、肉の中に閉じ込められた、鶏本来の旨味がお口の中に広がります。焼く、煮る、蒸す、炒める、揚げる、どのような調理法でも美味しさをじっくり味わっていただける地鶏です。



川俣シャモの丸焼き

川俣シャモの親子丼

DATA
【お問合せ】川俣町農業振興公社 ☎024-566-5860
【URL】<http://www.kawamata-shamo.com/>

古座川鹿肉のロースト



学校給食のジビエバーガーに舌鼓を打つ生徒たち

電源地域情報ひろば

特産品 開発情報

市のシンボルから生まれた

ひまわりオイル

なか
茨城県那珂市
地図 G

那珂市では、毎年夏に開催する「ひまわりフェスティバル」で、市花である「ひまわり」を会場周辺に咲かせています。このひまわりの種から生まれた新しい特産品が「ひまわりオイル」。からだに良いとされるビタミンE、オレイン酸など、ひまわりの種が本来に持つ成分を損なうことがないよう、低温で種に圧力をかける「低温圧搾方式」で、ていねいに搾って作りました。

クセ、べたつきのない、軽い仕上がりが特徴で、ドレッシングのベースはもちろん、炒め物、和え物、スープなどの料理にも最適の食用油です。



一面に咲き誇る市花のひまわり



開発されたひまわりオイル

DATA
【お問合せ】那珂市商工会 ☎029-298-0234
【URL】<http://www.nakashishokokai.com/>

学校給食にも本格採用

古座川ジビエ

こざがわちょう
和歌山県古座川町
地図 H

豊かな自然の恵み『古座川ジビエ』のブランド化が進められている古座川町。昨年より獣肉加工施設が本格稼働を始めました。昨年には、『ジビエバーガー』が全国で当地バーガーグランプリで1位を獲得するなど、町内の事業者も力を入れて商品開発に取り組んでいます。

昨年11月からは、地元のニホンジカの肉を使ったジビエ料理の学校給食への本格採用が始まりました。給食では、ジビエを使ったカレー、シチューの提供がされるほか、ハンバーグや竜田揚げも試作済み。子供たちの期待も高まります。

DATA
【お問合せ】古座川町産業建設課 ☎0735-72-0180
【URL】<http://www.town.kozagawa.wakayama.jp/>



『ショップ693』で販売されているオリジナルのブレンドハーブティー



豊かな自然と施設を活用したアクティビティも楽しめます

特有の環境が育んだ自然の恵み 青葉山の薬草

福井県高浜町
地図①

『若狭富士』として知られる青葉山。北陸と近畿の境界に位置し、北方、南方の多様な植物が自生する特殊な環境にあります。希少植物が多く、ここにしか自生しない福井県指定天然記念物の『オオキンレイカ』をはじめ、生薬などに活用できる植物が373種も自生しており、薬草の宝庫として注目されています。

高浜町では、そんな青葉山の豊かな自然の恵みである薬草の栽培に取り組んでいます。また、青葉山山麓の『青葉山ハーバルビレッジ』では、薬草やハーブを使用したフードメニュー、ハーブティー、薬草染めのスカーフなども販売されています。

DATA

【お問合せ】青葉山ハーバルビレッジ
☎0770-50-9012
【URL】<http://www.herbal-village.jp/>

自慢の山の恵み 山菜

岡山県真庭市
地図④

その面積の約8割が山林に覆われ、自然豊かな真庭市。山の恵みが豊富で、季節ごとに様々な山菜が収穫できます。現在、その山菜を活用した特産品開発が美甘地区で進められています。「ウルイ」や「コシアブラ」などの山菜の栽培実証が、地域の団体により始まっております。桜の時期に合わせて、コゴミのポット苗も発売予定です。

地元の老舗旅館では、旬の山菜を使った自慢の料理を味わうことができます。今後は、地元カフェなどでの山菜料理提供や、レシピ開発も予定。今後の新メニューにもご期待ください。

DATA

【お問合せ】美甘地域活性化推進協議会事務局
☎0867-56-2611



山菜の天ぷら



地域での栽培講習の開催風景です

浜のお母さんの手作り ベタの一夜干し

大分県中津市
地図⑩

豊前海に面する中津市では、秋から春先にかけて舌平目の漁が盛んです。中津では舌平目のことを『ベタ』と呼び、その一夜干しは保存食として各家庭で親しまれてきました。

そんな漁師の家庭の味を中津の名産にしたいと、漁協の女性グループ『浜の輪フレンド』が開発したのが『ベタの一夜干し』。新鮮なベタを、一枚一枚、丁寧に一夜干しにしました。焼き上げると、身はふっくらとして上品な味わい、エンガワはパリパリと香ばしく、酒の肴にぴったりの逸品です。

DATA

【お問合せ】大分県漁業協同組合中津支店
女性部加工・販売部門 浜の輪フレンド
☎0979-22-2103
【URL】<http://jf-nakatsu.brtnet.jp/>



ベタの一夜干し



オリジナルレシピ集も
開発しました



日野町の郷土の味 じゃぶ汁

鳥取県日野町
地図①

日野町の奥日野では、昔から大根、人参、里芋などの地元の旬の野菜、猪や鶏肉をたっぷり使った『じゃぶ汁』が、各家庭でハレの日に振る舞われてきました。あり合わせながら、季節の賜をこった煮にした『じゃぶ汁』は、具だくさんで栄養も豊富です。

日野町では、食生活の多様化などにより、その存在が薄れつつある『じゃぶ汁』がもう一度食卓へのぼるようにと、普及・啓発に取り組む、レシピ集を作成しました。アレンジも多様な『じゃぶ汁』、それぞれのご家庭でお気に入りの味を見つけてみてはいかがでしょうか。

DATA

【お問合せ】日野町産業振興課
☎0859-72-2101
【URL】<http://www.town.hino.tottori.jp/>



旬の食材が詰まった『じゃぶ汁』



遅咲きの山桜



ステージイベント

本州で一番遅い桜祭り 内山公園さくらまつり

桜の便りが全国から届く季節となりましたが、本州最北端に位置する大間町では、まだまだ桜の開花に時間がかかりそうです。

そんな大間町の桜の名所「内山公園」にて、本州で一番遅い桜祭りが開催されます。内山公園は見晴らしのよい高台にあり、桜とともに下北の山並み、津軽海峡の風景も楽しむことができます。会場では、カラオケ大会、歌謡ショー、大間グルメである『陸マガロ』(大間牛)を味わえる催しもあります。

遅い春の訪れを、大間で感じてみてはいかがでしょうか。

DATA

【開催日】5月21日(日)【会場】内山公園
【お問合せ】大間町観光協会 ☎0175-37-2233
【URL】<http://oma-wide.net/>

華やかに山車が練り歩く

かなんかしま 河南鹿嶋ばやし 山車まつり

宮城県石巻市
地図

恒例の「河南鹿嶋ばやし山車まつり」が石巻市広瀨地区で開催されます。鹿嶋ばやしは江戸時代から伝わる郷土芸能で、地域の子供達に、今もその伝統が受け継がれています。祭りでは、豊作や家内安全、商売繁盛を願い、子供たちが奏でるお囃子と一緒に、地域住民の手作り山車が、華麗に町の中を練り歩きます。「ソレ!」「ソレ!」といった元気のいい掛け声とお囃子が聞こえると、沿道に住民が駆け付け、山車を見守ります。河南地区に春を告げる風物詩です。

DATA

【開催日】4月16日(日)
【会場】石巻市河南広瀨地区(広瀨小学校付近)
【お問合せ】河南総合支所地域振興課
☎0225-72-2114
【URL】<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/>

勇壮な山車が練り歩く



華やかに飾られた山車



桃の香りに誘われて

桃の花見 フェスティバル

新潟県刈羽村
地図

刈羽村を代表する特産物である『砂丘桃』をPRしようと始まったイベント。花見会場となっている桃畑では、桃の花の甘い香りが漂い、見ごろを迎えた桃の花を眺めながらゆっくり散策できます。

イベント会場の刈羽村第2体育館では、お笑いやキャラクターショーなどに地域の人々が集い、アットホームな雰囲気に包まれます。なお、イベント会場から花見会場までは無料のコミュニティバスが運行されます。桃の花に彩られた、歌あり踊りあり笑いあり、の楽しい祭りです。

DATA

【開催日】4月16日(日)
【花見会場】刈羽村大字正明寺周辺の桃畑
【イベント会場】刈羽村第2体育館
【お問合せ】刈羽村役場産業政策課 ☎0257-45-3913
【URL】<http://www.vill.kariwa.niigata.jp/www/index.jsp>

満開の桃の花



賑わうイベント会場



浜辺で白熱のレース

第41回さがら草競馬大会

静岡県牧之原市
地図

夏は海水浴で賑わう「さがらサンビーチ」に、県内外から約40頭の馬が集まり、砂浜の周回コースを疾走する全国でも珍しい草競馬大会です。サラブレッドの迫力あるレースやかわいいポニーのレースが人気です。入場は無料です。会場内には地元特産品を扱う「田沼の市」や多くの露店が並びます。ポニー乗馬体験コーナーや、宝探し、人間草競馬レースなどお子様向けのイベントも盛りだくさんです。ヘリコプターの遊覧飛行もできます。GWのスタートは牧之原市にぜひお越し下さい。

DATA

【開催日】4月23日(日)
【会場】牧之原市相良 さがらサンビーチ
【お問合せ】牧之原市観光協会 ☎0548-22-5600
【URL】<http://www.makinoharashi-kankouyukai.com/>

浜辺を疾走するサラブレッド



かわいいポニーも砂浜を激走





地域ののど自慢によるカラオケ大会



色鮮やかな蘭の花が会場内を彩る

美しい花と笑顔が咲く しだい 四代らん蘭まつり

かみのせきちよう
山口県上関町
地図 Q

上関町の小さな漁村である四代地区にて、色とりどりに咲いた蘭の展示会『四代らん蘭まつり』が開催されます。色鮮やかな蘭は上関町花づくり連絡協議会の四代地区の皆さんが育てたもので、皆さんの力作が会場内に咲き誇ります。

会場内では、地元産の新鮮な野菜や海産物が販売され、買い物客で賑わいます。カラオケ大会や舞踊の発表会では会場内から暖かな拍手が送られます。地域の皆さんで作上げる、アットホームな祭りです。

DATA

【開催日】4月15日(土) 【会場】ひなの里よりあい館
【お問合せ】上関町役場四代事務所 ☎0820-65-0142

DATA

【開催日】5月3日(水・祝)~5日(金・祝)
【会場】高知県吾川郡いの町波川(仁淀川橋下)
【お問合せ】いの町産業経済課 ☎088-893-1115
【URL】<http://www.town.ino.kochi.jp/index.html>

清流を泳ぐ紙のこいのぼり



河原は多くの観光客で賑わいます



獅子舞競演



丸亀鉄砲隊演武

“みんなで作ろう みんなのまつり” 丸亀お城まつり

まるがめ
香川県丸亀市
地図 R

丸亀市の祭りを代表する『丸亀お城まつり』は毎年5月3日・4日に行われます。丸亀城下を練り歩く『まんでガンガン大行進』に始まり、『全日本骨付鳥選手権』、各地の特産品を集めた『丸亀・城下町こだわり大物産展』、フィナーレの『丸亀おどり総おどり大会』など、様々な催しがあります。

DATA

【開催日】5月3日(水・祝)・4日(木・祝) 【会場】丸亀城周辺
【お問合せ】丸亀お城まつり協賛会事務局 ☎0877-24-8816
【URL】<http://oshiro-fes.com>

新緑の美しい丸亀城内にも、食べ物広場や、様々な催し物が行われる『お城村』が、2日間限定でオープンします。丸々2日間、家族で楽しめるイベントに、ぜひ足をお運びください。

5月の清流に泳ぐ

によどがわ 仁淀川紙のこいのぼり

ちよう
高知県の町
地図 S

古くから手漉き和紙の生産で栄えたいの町。その技術を活かして生産されているのが、濡れても破けにくいという特徴を持つ不織布です。

「仁淀川紙のこいのぼり」は毎年5月に開催されるイベント。町特産の「不織布」で作られた、色とりどりのこいのぼりが清流・仁淀川を気持ちよさそうに泳ぐ姿がみられます。観覧ポイントの仁淀川橋の歩道は、多くの家族連れや写真家です。

河川敷の駐車場には露店が並び、仁淀川周辺の特産品を味わうこともできます。

子孫繁栄を願って踊り継がれる

ひな女まつり

あくね
鹿児島県阿久根市
地図 T

ひな女祭りは、阿久根市佐潟地区に古くから伝わる祭りです。旧暦の4月8日の釈迦如来の誕生日に、子どもの成長と子孫繁栄の願いを込めて行われます。

一家に女の子が生まれた家の者が、女の子(ひな女)を背中合わせに背負い、阿久根ハンヤ節に合わせて賑やかに踊る、集落の伝統行事です。

晴着で着飾られ、頭に名前入りの大きな鉢巻を付けたひな女の姿は、なんとも可愛らしく、みんなの笑顔誘います。町の人が総出で祝うこの風習に、古き良き日本の姿を垣間見ることができます。



地区総出で踊りの輪に参加し、祝福する

かわいく着飾られたひな女



DATA

【開催日】5月3日(水・祝) 【会場】阿久根市西目6927-3
【お問合せ】阿久根市生涯学習課 ☎0996-72-1051
【URL】<http://www.city.akune.kagoshima.jp/index.html>





**第46回電源地域
振興担当者講習会
を開催しました**

平成29年1月13日(金)に東京・築地の「全国情報サービス産業厚生年金会館(JJK会館)」2階多目的ホールにおいて、第46回電源地域振興担当者講習会を開催しました。

この講習会は、当センターが主催で開催しており、全国の電源地域立地市町村をはじめ、地域振興に関係ある皆様にご参加いただいております。国の諸政策や、専門家による講演、事例発表など、地域振興関連の諸情報を得ることができると、毎回ご好評いただいているものです。



第46回電源地域振興担当者講習会

今回の講習会では、地方創生被災地復興、エネルギー政策などに関連する幅広いテーマで講師陣にご講演いただきました。

経済産業省地域経済産業政策課復興庁、資源エネルギー庁電力基盤整備課、資源エネルギー庁原子力立地・核燃料サイクル課総務省地域力創造グループ地域政策課からは、平成29年度の各予算(案)や政策等についてご説明をいただきました。

また、東北経済産業局東日本大震災復興推進室からは東日本大震災後の復興状況と課題、日本原子力発電株式会社廃止措置プロジェクト室からは廃炉計画に関する基調講演をいただきました。

参加者からは、「講習会のテーマが多岐にわたる内容で良かった」、「国の担当から直接講習を受けられる貴重な機会だった。このような機会を今後も提供いただきたい」などのご感想をいただきました。

【お問い合わせ】
地域振興部 振興業務課
(研修事業担当)
☎03-6372-7305
🌐www2.dengen.or.jp/html/works/hanbai/kensyuu/index.html
✉kensyuu@dengen.or.jp



**研修No.4
「地域農業の活性化
策を学ぶ」を実施しました**

平成29年1月27日(金)に、電源地域振興センター会議室において、研修No.4「地域農業の活性化策を学ぶ」が開催されました。

講師であるNPO法人えがおつなげて代表の曾根原久司氏からは、「日本の田舎は宝の山、農村資源を都市のニーズと結びば10兆円産業が動き出す」と

題した基調講演がありました。ご講演のなかで曾根原氏は、地域資源と都市のニーズを結びつけた事業化の考え方や、これまで曾根原氏が各地で取り組んでこられた事例についてご紹介されました。

また、奈良先端科学技術大学院大学客員准教授の光井将一氏からは、「単なる農業振興ではなく、地域振興のツールとしての一次産業活性化と高齢化・人口減少社会への対応」と題したご講演をいただきました。その後、「本音を吐くのは恥だが役に立つ」課題の本質をとら



研修No.4 意見交換



研修No.4 講演



**研修No.5
「地域特産品のブランド化支援」を実施しました**

平成29年2月23日(木)・24日(金)の2日間にわたって、電源地域振興センター会議室において、研修No.5「地域特産品のブランド化支援」が開催されました。研修の講師には、(株)生産者直売のれん会地域プロモーション支援本部コンサルタント伊藤拓哉氏、八木智弘氏、同社商品企画室室長・森弘氏、同社商品企画室室長・森弘氏の3名をお招きし、ご講演いただきました。

え、解決の道を照らすために」というテーマで、参加者同士、参加者と光井氏による意見交換を開催いたしました。

参加者からは「田舎の活かし方についてたいへん参考になった」、「これまで地域の意見しか聞いてこなかったが、全国各地の意見を聞けて良かった」等の感想が寄せられました。

【お問い合わせ】
地域振興部 振興業務課
(研修事業担当)
☎03-6372-7305
🌐www2.dengen.or.jp/html/works/kensyuu/index.html
✉kensyuu@dengen.or.jp

第1日目は、伊藤氏より、「地域特産品開発のはじめかた、育て方」というテーマでの基調講演をいただき、八木氏からは長崎県杵岐市、東京都大島町、鹿児島県指宿市の事例をご紹介いただきました。その後「経営戦略・経営資源の明確化」、「独自市場の設定」というテーマでのワークショップを開催し、参加者同士で意見やアイデアを出し合いました。第2日目には、森氏より千葉県山武市、東京都小平市での事例をご紹介いただき、「商品・市場の仮説検証」というテーマでのワークショップ

を開催しました。

事後、参加者からは「他地域の事例を多く聞くことができ、たいへん勉強になった」、「改めて地域の宝を見つめなおすことができた」といった感想が寄せられました。



研修No.5 ワークショップ

【お問い合わせ】
地域振興部 振興業務課
(研修事業担当)
☎03-6372-7305
🌐www2.dengen.or.jp/html/works/kensyu/index.html
✉kensyu@dengen.or.jp



研修事業のご案内

当センターでは、電源地域の長期的かつ自立的な地域振興をお手伝いすることを目的として研修事業を実施しております。当センターの研修事業には以下のような特徴があります。

- ①電源地域にとってニーズの高いテーマ設定
- ②経験豊富で専門的知見・ノウハウを有した講師陣
- ③先進事例紹介・グループワークなど具体的かつ実践的なカリキュラム

研修No.5 講演



対象は電源地域市町村・道府県の行政職員、各種団体、事業者、NPO、個人、電力会社等で電源地域の振興に関わっている方、となっております。

本研修事業を皆様の地域のまちづくりに、ぜひご活用ください。平成29年度実施予定の研修につきましては、当センターのホームページをご覧ください。

【お問い合わせ】
地域振興部 振興業務課
(研修事業担当)
☎03-6372-7305

🌐www2.dengen.or.jp/html/works/kensyu/index.html
✉kensyu@dengen.or.jp



「博多大丸」にて 産品実践販売を 行いました

「産品実践販売」は、電源地域の特産品事業者の販売力向上を支援する事業です。大消費地においてテスト販売を行い、実店舗からのアドバイスや消費者の反応を通じて、販売テクニックの習得や消費者にニーズ把握を図ることが出来ます。産品実践販売では、「一般型」と「短句型」の2種類の実施タイプをご用意しております。「一般型」は大都市圏の百貨店や総合スーパー等の食品催事スペースで1週間程度販売を行うものです。

「短句型」は、消費者とのコミュニケーションがより密にとれるマルシェや商店街などの店舗で2日間程度販売を行うものとなっております。

平成29年2月15日(水)～21

日(火)までの7日間、福岡市の『博多大丸』東館エルガーラの食品催事スペースにおいて、「一般型」の実践販売を実施しました。今回は電源地域の4事業者が参加しました。参加事業者からは、「商品に対するニーズやお客様の動向を把握できた」、「1週間販売してみても、ご愛顧くださっているお客様の応援に支えられていることを改めて実感した」との感想をいただきました。

平成29年度も、こうした販売支援サービスを実施する予定です。ぜひ、下記までお気軽にお問い合わせください。詳細

お問い合わせ



博多大丸での
実践販売



平成29年度上期 原子力発電施設等周辺地域企業立地支援事業 (通称、F補助金)の募集を開始します

F補助金は、原子力立地地域における雇用機会の創出と産業振興を図るため、雇用の増加を生む企業に対して、一定期間にわたって企業の支払った電気料金等に基づき、道府県が給付金を交付する制度です。

当センターでは、道府県からの要請を受けて交付事務・審査業務を行っています。平成29年度上期募集は、平成29年4月に行われる予定です。詳細は、募

集時の応募要領をご覧ください。応募要領は、当センターのホームページに掲載予定です。

【お問い合わせ】

総務企画部 立地審査課
☎03-6372-7307

🌐www2.dengen.or.jp/html/works/yuchi/yuchi01.html
✉riti@dengen.or.jp



ほそかわ しげのり
細川 甚孝 さん

KEY PERSON



自治体職員は実践的なスキルの向上を目指そう

各方面で活躍する「まちづくりのKEY PERSON」に地域活性化の視点をお聞きしています。今回は、様々なコンサルティング/シンクタンクでリサーチャー及びコンサルタントとして、地域活性化、行政評価、総合計画などの策定支援の業務に従事している細川さんに、お聞きしました。細川さんには、平成29年5月開催予定の当センターの研修「成果が見える政策づくり(仮)」の講師をお願いしています。

有効なお金の使い方を考える

今、確かに「地方創生」の『うねり』は高いと言えるのではないのでしょうか。

国から地方へ、結構な額のお金が投入されていますが、こうした“アベノミクス”の真価は2年後、3年後に問われてくることになると思います。

しかし、行政職員の現状はどうでしょうか。

平成の大合併以降、行政職員の数は削減されました。残業も規制されています。そうした中で「成果」を求められているため、多忙を極めていると言ってよいでしょう。

「何をやる? 何をしたいか?」ということをしつくりと考える時間がないのが現状ではないのでしょうか。

注意すべきは「お金」に頼り過ぎることがないようにすることです。「お金」をたくさん獲ってきて成功していない地方はたくさんあります。

「お金を獲るために、「とりあえずの施策」を打ち出す場合が多いのではないのでしょうか。

地域の発展にはどんな事業が必要で、その実現には何年、いくらかかるかをしっかり詰めてから、必要最小限かつ有効なお金の使い方をすべきでしょう。

そのためには、職員の「情熱」が最も重要で、住民としっかり対話して計画を策定することが必要となってきます。

しかし、情熱があっても人が不足しているため、それを埋めるためのお金が必要という悪循環になっているケースも多いかと思えます。

全体のスキルを上げていく必要

今は「ヤル気」さえあればできる時代と言われています。だから「スーパ

ー公務員」が登場するわけですが、その負荷は大変なもので、持続的ではありません。

むしろ、一人のスーパーマンより100人が少しずつスキルを上げる方が効果的だと思います。誰もが「行政評価」や「政策形成」のスキルを身につけていけるようにすることが大事であり、その仕組みを積み上げていくことが、必要なのです。

一般的に、行政職員の多くはゼネラリストです。専門に特化した能力ではなく、全体的にスキルを上げる努力をすべきで、誰がやっても、高いレベルでの「意思決定」ができる仕組みが必要だと思います。

現在、コンサルタントが多く市町村に入っていますが、彼らはあくまで「傭兵」です。契約が終われば去っていきます。ですから自治体職員のスキルを上げていくことは必須だと思います。

自治体職員に要求される能力とは

地方創生施策が全国的に展開される中で、地方自治体の政策形成は、施策を策定・実施して終わり、というものから、地域の実態や住民のニーズを踏まえて本当に成果がある施策を吟味選定して展開するという手法に変わってきています。

民間の成果とは利潤ですが、行政の成果は、最終的には住民福祉の向

上にあります。

具体的に言えば、自治体職員にとって成果とは、「愛する地域」になっているか、行政サービスに対する「住民の満足度」があるかだと思います。

3年後(実施計画)、5年後(基本計画)、10年後(基本構想)の地域の「あり方」をイメージできるか、「数字」や「住民の顔」がイメージできるかということです。

今回、私が担当する研修では、まずコンサルタントに頼ることなく、自治体独自の施策形成の必要性を学んでいただきます。

次に行政課題の発見手法を実践的に学んでいきます。効果的な施策を策定するためには課題を正しく把握することが必要となることから、経済性・有効性・効率性などの事業評価や「オープンデータ」の各種数値の使い方、ワークショップなどにおける「住民参加」「ファシリテーション」などの多様な手法などをご紹介します。

また、受講者の皆様に各地域の施策を持ち寄っていただき、グループ討議などを交えながら、ご紹介した手法を用いた施策・事業策定プロセスを実践していただきます。

今回の研修を通して、今後求められるであろう施策の見直しにおいて、より効果的な計画を策定するための手法を体感的に学んでいただきたいと思います。(談)

略歴

合同会社政策支援代表。1971年、秋田県仙北市生まれ。都留文科大学文学部社会学科卒業。上智大学大学院文学研究科社会学専攻博士前期課程修了・後期課程満期退学。早稲田大学大隈記念大学院公共経営研究科修了。

1999年以降、農林水産省系列のシンクタンクを皮切りに、様々なコンサルティング/シンクタンクでリサーチャー及びコンサルタントとして、地域活性化、行政評価、総合計画などの策定支援の業務に従事。2012年独立。現在では、自治体での公共経営に関する研修講師、様々な民間企業での社内コンサルタントとしても活動。早稲田大学パブリックサービス研究所招聘研究員(兼任)、行政経営フォーラム会員、一般社団法人日本経営協会講師。